

8月24日（日）マルコの福音書14章53～65節

「わたしが、それです。あなたがたは、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」（62節）

イエスを捕えた人々は、大祭司のところへ連れて行きました。そこには、イエスに敵対する祭司長たち、長老たち、律法学者たちが待ち構えていました。いったんは逃げ出したペテロも、遠くからイエスの後について大祭司の家の庭の中まで入って行き、事の成り行きを見守ろうとしたのでしょう。この裁判は「イエスを死刑にするため」のものでした。ですから、「祭司長たちと最高法院全体は、イエスを死刑にするため、彼に不利な証言を得ようとしたのですが、何も見つかりませんでした。」（55節）それは偽証によって証拠をつかもうとしたからです。数人が立ち上がって、イエスに対する偽証をして言ったのは、イエスの公生涯の初期の宮きよめの事件（ヨハネの福音書2章19節）にまでさかのぼる証言でした。（58節）実際にその箇所を見てみますと、イエス様は「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」とされています。58節の証言はイエス様の言われていることと全く違ってきますから、人々は偽証によってイエス様を訴えようとしたことがよく分かります。このような人々の偽証に対して「しかし、イエスは黙ったまま、何もお答えに」なりませんでした。（61節）もし私たちがイエス様の立場であつたらどうでしょうか。すぐに憤慨して反論し、自己弁護を始めるはずで、なぜイエス様は黙ったままでおられたのでしょうか。それはすべてを父なる神様にゆだねておられたからです。悪をもって向かって来る者に対してイエス様は決して自らで対抗しようとせず、すべてを最善に導かれる主にゆだねていたのです。このイエス様の姿に私たちがならうべきです。

しかし大祭司が「おまえは、ほむべき方の子キリストなのか。」と尋ねました。この大祭司の質問の意図は、キリストであると同時に、ほむべき方の子、すなわち文字どおりの神の子、もしくは神そのものなのかということです。イエス様は「わたしはそれです。」と即答され、「人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずで。」と言われました。つまりイエス様はご自分が十字架におかかりになることを知っておられ、またそれを父なる神のみこころと確信していました。そしてその後「力ある方（＝父なる神）の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずで。」と言われました。すなわち今宗教指導者たちによりさばかれているイエス様ご自身が、権威を帯びてこの地上に来られる時に、今度はイエス様があらゆる者をさばかれるというのです。その時にイエス様はここに出てくる人々のように偽証をもってさばくのではなく、ご自身の義と聖さをもって、すべての

人の行いに応じてさばきをされます。そして、大祭司は、その証言をもって神を冒瀆したとして、イエス様を死に値すると決めました。

私たちも恐れるべき方を恐れなければなりません。私たちが恐れるべき方は人ではなく、究極的なさばきを下される主ご自身なのです。そして、どんな中にあっても、すべてを正しくさばかれるお方にお任せして、常に平安のうちに歩んでまいりたいと思わされます。

8月25日（月）マルコの福音書14章66～72節

「するとすぐに、鶏が、二度目に鳴いた。そこでペテロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは、わたしを知らないと言います」というイエスのおことばを思い出した。それに思い当たったとき、彼は泣き出した。」（72節）

66節は、54節で遠くからイエスの後について、大祭司の家の庭の中に入って行ったペテロの話に戻ります。「まさに今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います。」（14章30節）とイエス様がペテロに言われましたが、そのイエス様のことばがここで成就することとなります。最初は「あなたも、ナザレ人イエスと一緒にいましたね。」と言われた時でした。ペテロはそれを否定して、「何を言っているのか分からない。理解できない。」と言って前庭の方に出て行き、するとまず一回鶏が鳴きました。（67、68節）言ってみれば彼はとぼけたふりをしたのです。すると召使いの女が「この人はあの人たちの仲間です」と言い出しました。するとペテロは再び否定しました。しばらくして、そばに立っていた人たちが、またペテロに「確かに、あなたはあの人たちの仲間だ。ガリラヤ人だから。」と言ったことに対して、「私は、あなたがたが話しているその人を知らない。」と言い、のろいをかけて誓い始めました。のろいをかけての誓いは、ユダヤ人の間では非常に重大な誓いです。最初はとぼけるように「何を言っているのか分からない。理解できない。」と言っていたのが、最後には「私は、あなたがたが話しているその人を知らない。」とイエス様との関係を完全否定し、しかものろいをかけて誓い始めるほどでした。最初は軽いつもりでの否定が最後には非常に大きな罪へと発展していったのです。私たちも最初は大したことはないと思っていたことが非常に大きな罪へと発展することがあるのです。ですから罪を軽く考えないで、神様から示された罪をすぐに悔い改めて離れなければなりません。

72節に「そこでペテロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは、三度わたしを知らないと言います。」というイエスが自分に話されたことを思い出した。」とあります。私たちは日々みことば

をどのように読み、みことばからの語りかけをどのように聞いているのでしょうか。ここには「イエスが自分に話されたこと」とあります。イエス様は、今もみことばを通して、他の誰かではなく、あなた自身に語りかけておられます。イエス様が自分に語りかけておられるとの信仰をもって語られるみことばを謙遜に聞き、それに応答する信仰を主から与えられたいと思わされます。

いずれにいたしましても、イエス様の大祭司の前での決してひるむことのない大胆な証しとペテロの三度の否定はあまりにも対照的です。なぜこのようなことになったのだろうかと考えた時に、やはり御霊に満たされていたことがイエス様を強くしたのではなかろうかと思わされます。実際にペンテコステの後、御霊に満たされたペテロは別人のように変えられ、大胆に説教をし、民の指導者や長老の前で信仰の証しをしました。「たとえ皆がつまずいても、私はつまずきません。」などという決意はいざと言うときには何の役にも立ちません。御霊に満たされ、イエス様のように大胆に信仰を証しする者とさせていただきます。

8月26日(火) マルコの福音書15章1～5節

「ピラトはイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」イエスは答えて言われた。「あなたがそう言っています。」(2節)

前夜の議会において、大祭司が「おまえは、ほむべき方の子キリストなのか。」と尋ねたことに対して、イエス様は「わたしは、それです。人の子が、力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることとなります。」(14章61、62節)と答えられましたが、そのことによって宗教指導者たちはイエス様を冒瀆罪として訴える口実を得ました。ところがローマ政府は宗教問題は裁判に取り上げませんでした。(使徒の働き18章12～16節参照)ですからイエス様を訴えたいと思っていた人たちは、どうしても彼を政治犯に仕立て上げなければなりませんでしたが、キリストをユダヤ人の王に仕立てるとことによりイエスをローマ帝国に訴えようと考えました。つまり、ルカの福音書23章2節にありますように、人々を惑わし、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っているということを主張したのです。つまり民の扇動と納税拒否とローマ帝国に対する反乱を企てているということです。こうして議会はイエスを縛って連れ出し、ピラトに引き渡しました。ですから、ユダヤの総督であったピラトは、イエス様にまず「あなたはユダヤ人の王なのか」と尋ねました。それに対してイエス様は、「あなたがそう言っています。」と答えていますが、実際には「あなたの言っ

ているとおりで。」というような意味です。もちろんこの時のユダヤ人の王はイエス様ではなく、ヘロデであることは、ピラトももちろん知っていたことでしょうし、逆になぜこのようなことで訴えられているのかが不思議だったに違いありません。しかしイエス様は確かに王でした。それはユダヤ人たちが考えていたような政治的な王ではなく、神の国の王であり、旧約聖書の希望の預言を成就されるという意味での王でした。図らずもユダヤ人たちはイエスを王と呼びましたが、決してイエスを崇めることもなく、まことの王、王の王、主の主であるお方を十字架につけて殺してしまっただけです。

イエスキリストは私たちにとって王なるお方です。なぜなら私たちは御国に属する民であり、イエスは御国において権威を持って支配される王だからです。私たちは、この王であるイエス様に対し御国の民として、また王の僕としてどのような態度を取っているのでしょうか。みこころに忠実に従っていますか。いつもほめたたえ、王であるキリストの栄光のみが現れることを願っていますか。もう一度キリストを王とする御国の民の一員である自らを深くおぼえましょう。

8月27日(水) マルコの福音書15章6～15節

「すると彼らはまたも叫んだ。「十字架につける」」(13節)

イエスが十字架につけられるまでに、さまざまな人間の罪が見え隠れしています。「祭りのたびに」すなわち過ぎ越しの祭りの時に、「人々の願う囚人一人を釈放していました」(6節)ので、群衆は上って来て、いつものようにしてもらうことを、ピラトに要求し始めました。ピラトは、祭司長たちが、ねたみからイエスを引き渡したことを、知っていたので「つまり、イエス様は無罪であって、ただ祭司長たちがねたみからイエスを自分に引き渡したとの確信があったので、このならわしを利用してピラトはイエスを釈放しようとしたのです。それで「おまえたちはユダヤ人の王(=イエス)を釈放してほしいのか」と尋ねます。しかし人々はイエスではなく、バラバの釈放を要求しました。なぜなら「祭司長たちは、むしろ、バラバを釈放してもらうように群衆を扇動した」(11節)からです。大祭司のもとでの裁判においても多くの者がイエスに不利な偽証をしましたが(14章56節)ここでも大祭司によって扇動された人々がイエスを十字架につけることを要求しました。実際には誰の目から見ても、キリストが十字架につけられるということはなかったはずでしたが、人々の罪がキリストを十字架につけることとなりました。しかも祭司長たちの内側には「ねたみ」という罪がありました。お

そらく祭司長自身も気にもとめなかったかもしれませんが、その罪がイエスを十字架につけたのです。

ピラトは祭司長たちがねたみからイエスを引き渡したのを知っていました。またイエスに罪はないことを確信していたので「あの人がどんな悪い事をしたのか。」(14節)とも言っています。本来であれば自らの権限でイエスの無罪を宣言することができたはずですが、しかし彼は「では、おまえたちがユダヤ人の王と呼ぶあの人を、私にどうしてほしいのか。」(12節)と判断を群衆にゆだねて、自分はそこから逃げました。それで人々は「十字架につけろ」と叫び、群衆が「十字架につけろ」と、ますます激しく叫び続けたので、「群衆を満足させようと思い、バラバを釈放し、イエスをむちで打ってから、十字架につけるために引き渡しました。」ピラトの無責任で、自らの総督としての信念よりも人のご機嫌をとる態度がキリストを十字架へと追いやったのです。回りの人との関わりの中で私たちはこのピラトのように、キリスト者として自らの態度をはっきりとさせるよりも、人の顔色をうかがうことはないでしょうか。

本来であれば、暴動で人殺しをした暴徒たちとともに牢につながれていたバラバが十字架刑にされるはずでした。しかしそのバラバが釈放されて罪のないイエス様が十字架につけられることになりました。本来であれば罪人であったこの私が神の御怒りから来るさばきをその身に受けなければならなかったにもかかわらず、罪を知らないキリストが、私の罪をその身に負い、十字架の上で私の罪のさばきを受けてくださったことにより私の罪も赦されました。まさに罪人のバラバが釈放されたように、私たちも罪のさばきから解放されました。しかし私たちは、ただ罪が赦されたことを喜びつつ、そこで満足するだけではなく、罪を赦された者、また罪を贖われてキリストのものとされた者としてどのように生きるかが、常に問われているのです。

8月28日(木) マルコの福音書15章16～20節

「また、葦の棒でイエスの頭をたたき、唾をかけ、ひざまずいて拜んだ。」(19節)

十字架につけるためにイエスを引き渡された兵士たちは、「中庭、すなわち総督官邸の中に連れて行き」ました。(16節)エルサレムの東の端に神殿があり、西の端にヘロデの宮殿がありました。総督ピラトは、普段はカイザリアに住んでいましたが、祭りの間はエルサレムに出向いていたので、ヘロデの宮殿が総督の官邸として使われていたと言われています。そこには軍隊の宿営所があり、治安のためにエルサレムにいた全部隊が呼び集められました。

そして「イエスに紫の衣を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ」ました。(17節)「それから「ユ

ダヤ人の王様。万歳」と叫んで敬礼し始めました。」そのようにして本来忠誠を誓い、王を賛美することばをもってイエスをからかったのです。まさに異邦人である兵士たちはユダヤ人の王、救い主をばかにしてこのようにからかったのでしょうか。さらに葦の棒でイエスの頭をたたき、唾をかけ、ひざまずいて拝んだりして、「彼らはイエスをからかってから」紫の衣を脱がせ、元の着物を着せて、イエスを十字架につけるために連れ出しました。イエス様の顔からは、茨による血と吐きかけられた唾が混じり合いながらしたり落ちていたことでしょうか。そして着ていた着物にはむち打たれたことによる傷からの血がにじんでいたはずで

す。私たちは、このような兵士たちの所業をひどいと思いますし、赦し難いと憤るかもしれません。しかし、それは本来イエスがどのようなお方かということを知ったからそのように思えるのであって、まさにこの兵士たちの姿は罪人の姿そのものなのです。実際に私たちが神を知る前には神を恐れない者として、これと同じような態度を取っていたのです。神を信じる前には神をも恐れず、時には神を馬鹿にするようなことを口にしたこともあったはずで

す。そして何よりも私たちの罪が、キリストに茨の冠をかぶらせ、激しく鞭を打ち付け、十字架への道を歩ませたのです。

「しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒された。」(イザヤ書53章5節) まさに、このみことばの成就のためにイエス様は十字架への道を歩まれました。確かに人の目から見れば、十字架につけるために引き渡されましたが、イエス様は私たちの罪の贖いのために、自ら十字架への道を歩まれ、異邦人の兵士たちの嘲りをそのまま受けられたのです。そして、私たちは、茨の冠をかぶらせられ、むちで打たれ、十字架につけられたお方の御前にひざまずき、ほめたたえ、礼拝をささげています。そして私たちはすべての栄光をこのお方におささげするべきなのです。私たちはそのように願いつつ、そのような生き方がされているでしょうか。

8月29日(金) マルコの福音書15章21節

「兵士たちは、通りかかったクレネ人シモンという人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。彼はアレクサンドロとルフォスの父で、田舎から来ていた。」

十字架につけられるために連れ出されたイエスは、町の門の外へ自分がつけられる十字架の横木を背負いながら歩かされました。十字架刑は、ローマ帝国に逆らう者がないようにするた

めの人々に対する見せしめの部分も大きかったのだろうと思われます。裁判によって前の晩一睡もせず、むち打たれたキリストが重い十字架を背負って歩くことに耐えられなかったことは明らかでした。それで兵士たちは、田舎から出て来てたまたまそこを通りかかったクレネ人(注:北アフリカの地中海に面した地域で、現在のリビアではないかと言われていて、そこには離散したユダヤ人のコミュニティーが存在していた)シモンに、イエスの十字架を無理やり背負わせました。十字架は重いし、人々からは好奇の目で見られるし、彼にとってはとんだ災難だと思ったかもしれません。しかしイエスは、「だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」(8章34節)と言われましたが、父なる神様は私たちに対しても望まない十字架を無理やり背負わせられることがあります。私たちは、何とかしてその望まない十字架を下ろしてしまいたいと思うことでしょうか。しかし、神様から与えられた十字架は私たちにとって決して無意味なものではなく、私たちの信仰にとって必要なものであることをおぼえましょう。それとともに神様は背負った十字架に変えて、いつの日にか必ず私たちに大きな栄光を与えてくださいますから、その神の約束を信じて、忍耐を持って与えられた十字架を最後まで背負い続けたいと思わされます。

このシモンのことに関しては聖書はこれ以上何も語りませんので、この後どうなったかは分かりません。マルコはここでシモンを「アレクサンドロとルフォスの父」と名指しで紹介しています。つまり、シモンが十字架を負って三十年後に、マルコが福音書を書くころには、アレクサンドロとルフォスの父と言えば、皆が分かるほどにクリスチャンの間で名の知れた人物になっていたということなのでしょう。恐らくあの日シモンは十字架を刑場まで運び、イエスの十字架に関して起こったことを見て、ついにはイエスを信じて、その信仰が息子たちにまで及んだと思われます。無理やりに十字架を負わされた苦痛を通して、信仰に導かれた幸いをシモンは得ました。そのようにして神様はさまざまなかたちで働かれるのです。

8月30日(土) マルコの福音書15章22～27節

「彼らは、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右に、一人は左に、十字架につけた。」(27節)

兵士たちは、刑場である「ゴルゴダという所」までイエスを連れて行き、いよいよ十字架につける作業が開始されました。23節にある「没薬を混ぜたぶどう酒」には、一種の麻酔効果があったので、十字架の苦しみを少しでも和らげようとするあわれみの意味があったのではないかと思います。しかしイエスはそれをお飲みになりませんでした。恐らく十字架の苦しみ

と痛みをすべて受けとめようとされたのでしょうか。

「彼らは、イエスを十字架につけ」ました。(24節) 十字架刑は、ペルシャ人が考案し、カルタゴ人が発展させ、ローマ人が完成させたと言われています。十字架刑は、まず十字架の縦木の上に受刑者を寝かせ、手を横木の上に広げさせ、手首の上部に鉄の釘を打って木に固定させます。足は、片方の足をもう片方の足に重ねた後、その上から釘を打ち込みます。そしてはしごや滑車を使って立てて、地面に固定します。この時に使われた釘の長さは、11,5 cmになるものもあったと言われています。そして、そのまま死ぬまで放置されます。中には、早く死ぬことがないようにと足台が設置されることもあったようです。いずれにしても、十字架刑は人をゆっくりと苦しめながら死なせる残酷な処刑方法であったため、ローマ市民には適用されませんでした。昨日も書きましたように、ローマ帝国に逆らわせないようにさせるため、見せしめ的な要素が強かったのでしょうか。まさに、イエスが十字架にかかれたことで「犬どもが私を取り囲み 悪者どもの群れが私を取り巻いて 私の手足にかみついたからです。」(詩篇22篇16節)のみことばが成就しました。その後、イエスを十字架につけた兵士たちは、「くじを引いて、だれが何を取るかを決め、イエスの衣を分けました。」これも、「彼らは私の衣服を分け合い 私の衣をくじ引きにします。」(詩篇22篇18節)のみことばの成就を意味しています。「また彼らは、イエスとともにふたりの強盗を、ひとりは右に、ひとりは左に、十字架につけ」ました。(27節) これはまさに「彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからである。」(イザヤ書53章12節)のみことばの成就と考えることができます。このように、イエスの十字架は、まさに旧約の預言の成就の結果であることが分ります。それは、すべて父なる神様のご計画どおりであり、すべては父なる神様のみことばによってなされたということです。また、キリストは、強盗たちのかしらであるかのように、真ん中につけられました。まさに私自身が「罪人のかしら」(テモテへの手紙第一1章15節)として神のさばきを受けるべき存在でありましたが、キリストがまさに罪人のかしらとして十字架についてくださったことにより、私の罪が赦されたのです。

あらためてキリストの十字架は、私たちが考えるよりもはるかに過酷なものであることが分ります。なぜ父なる神様は、人類の救いのために十字架刑を選ばれたのかは分かりませんが、私たちが受けるべき罪のさばきとしての想像を絶する十字架の苦しみをイエス様は私たちのために受けてくださいました。十字架の痛みよりも、イエス様の愛は大きくて深かったからです。